

## アトモスフィア

## 近頃気になっていること

名取 俊二

思慮が足りなかったせいかわい頃は、研究の価値とか善し悪しについて、割合はっきりした意見を述べたように思う。特に、学会や学位発表会などではかなり辛辣な発現をして周囲のひんしゅくを買った覚えもある。しかしよく考えてみると、研究の価値を測る絶対的なメジャーなど存在しない。どういう立場に立つかでメジャーが変わるのである。人類の福祉の向上に資するという立場に立てば、「アルツハイマー病の研究」は「蚤の Honden の研究」よりはるかに価値のある研究である。今の世の中の風潮では、研究の価値が人の役に立つか立たないかという基準で判断される場合が多く、大型の研究費には殆どの場合特許の申請や成果の社会還元が要求される。この不景気の中で、国民の税金を使って研究するのだから、人の役に立たないような研究は排除され、成果の社会還元が要求されるのは当然である。ところが、世の中には後者のような研究に大変興味を持って取り組んでいる人が少なからずいることもまた事実である。そこで、前者のような研究を重視する余りに、後者のような研究を全くないがしろにしてしまっただけかという議論が出てくる。詭弁かも知れないけれど10年後に後者の研究がヒントになって、人の役に立つ新しい研究が展開する可能性を否定することは出来ないであろう。

今の世の中の風潮でもう一つ気になるのが、インパクトファクターなる数値によるジャーナルの格付けである。発表した論文のインパクトファクターの高低が、その研究者の研究費やポストの獲得に大きく影響するようになってきた。若い研究者の中には、ランクの高いジャーナルに論文を出しやすくするために、殆ど貢献がないような欧米の研究者を著者の中に加える例もあると聞く。偏見かも知れないけど、ジャーナルの格付けはアメリカ主導の商業主義の産物で、これが確立したおかげで一番ほくそ笑んでいるのは、ランクの高いジャーナルの出版社であり、研究者はいたずらに踊らされているだけのように思われてならない。

私は、若いうちは世に媚びたり人におもねったりすることなく、自分が面白いと思ったらその研究を大いに進めてみたら良いと思っている。そこで問題となるのが、研究費である。研究費を申請すると、当然のことながら審査を受けなければならない。そして、申請が採択されるか不採択になるかは審査員のメジャーで判断される場合が多い。また、研究者の研究能力を出来るだけ客観的に評価をしようということで、多くの場合論文リストの提出を求めているが、そのリストがインパクトファクターだけで機械的に評価される恐れも多分にある。

時流に乗った研究をしてランクの高いジャーナルに論文を出し、研究費やポストを順調に獲得してどんどん出世していく研究者もいれば、殆ど人の返り見ないような領域で、うだつが上がらない研究をこつこつ続けている研究者もいる。後者のような研究は例え論文にまとめても、とてもランクの高いジャーナルなどへは出せないだろう。そうかといって、この種の研究を全く無視してしまっただけか。こういう研究の中に、本当に独創的で将来性のある研究が隠れているかも知れない。「呑舟の魚は枝流に游がず」という諺があったが、科学の世界では枝流にも呑舟の魚となる稚魚が住んでいる可能性が十分ある。ところが今の世の中の風潮を見ていると、そういう稚魚の発見と育成がますます難しくなっていくような気がしてならない。